

国際比較のなかの日本 中嶋嶺雄



去る二月は、ソ連科学アカデミーの招待でモスクワに二週間滞在し、帰途、テヘラン経由、ニューデリー、バンコク、香港、ソウルと飛行訪問して帰国した。

ソ連人の対日感情

ソ連での私の日程は、科学アカデミーの各研究所で最近の中国情勢について講演したり、ソ連の中

のだが私は今回で三度目のモスクワ訪問を経験してソ連のインテリや若者のあいだに日本にたいする関心がとみに高まっていることを感じた。北方領土問題では日ソ間に困難な障壁があるにもかかわらず、モスクワ市民の対日感情はきわめて良く、しかも工業先進国としての日本の高い生活と消費の水準にあこがれ、誰もが日本へ来たがっている。

エストニア共和国

エストニア共和国のタリンへ行つた。タリンは、バルト海に面するソ連邦エストニア共和国の首府

で、一四一五世紀以来のハンザ同盟の商業都市の面影がそのまま残っている古い小都市である。エストニア人はフィンランド系の民族でエストニア語を話し、どことなく垢抜けていてロシア人の世界とは趣きを異にしている。また、エストニア共和国はソ連でもっとも西欧化した生活水準の高いところであるだけに、ここで社会主義を発見することは困難なくらいである。

自国の優位性誇示

そのタリンでは、エストニア共和国科学アカデミーの幹部たちが接待してくれたが、やはり日本にたいして大きな関心を寄せ、是非とも日本と交流したいといっていた。とくに化学・造船・電子工業などの分野で日本の技術を導入したいとのことであり、公害対策についても日本の先進的経験を学びたいとのことであった。あまり日本のことをほめるので、こちらの方が同行したロシア人に気がねをするほどだったが、あとでいろいろ調べてみると、エストニアは一九四〇年にスターリンによって否応なくソ連に併合された歴史をもつだけに、ロシア人にたいする潜在的な反感をみずから社会発展の優位性において示そうとしているようである。

ひるがえって私たち日本人は、とかく自国を卑下し、甚だしき場合には自国を批判・告発することで満足している人もある。私たちは、国際比較のなかで日本の位置を冷静に見直し、その良い点は、これを胸を張って堂々と誇示し、強く擁護してゆかねばならない、と私は思う。(東京外語大助教授)